

第 60 号

会報

青山学院大学
日本文学会

2026 年 3 月 15 日

(題字) 湯地 孝先生



誤解の効用

日本文学会会長 高田 祐彦



ある作品に次のような一節がある。

すべて男も女も、わろ者は、わづかに知れる方のことを残りなく見せ尽くさむと思へるこそ、いとほしけれ。

個人的な経験であるが、ある時、この一節がぼんやりと頭に浮かび、たしか『徒然草』にあったなと思いつながら、パラパラと本をめくってみたが、出てこない。その時は、おかしいな、まあいいや、と思つたのだが、しばらくして、やつぱりちゃんと探してみようという気になった。とは

いえ、この一節はぼんやりと頭にあってただけなので、語彙を手がかりに索引を引いてみることもできない。仕方なく『徒然草』を最初から全部通読した。

しかし、出てこないのだ。すぐには他の文献で見当がつかず、もしかするといろいろな文献のことばが自分の中で一緒にたまった考えかもしれない、などと思つて諦め、しばらく放つておいたのだが、ある時、偶然見出した。

これは、『源氏物語』帚木巻、有名な雨夜の品定めと縮め括りの一段、その中の一節だったのである。

雨夜の品定めといえ、女性談義であるから、こういう言い方で人間一般に該当する総括的な内容が語られていたことは、忘れていたのである。

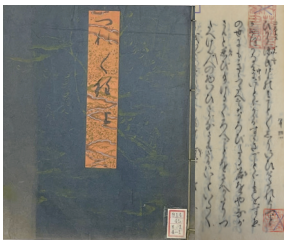
その一節の発見という目的からすれば、『徒然草』の通読は徒勞であつ

たが、他方、非常に良い経験にもなった。すでに全部を読んでいたとはいえ、こんなことも書かれていたのか、という新鮮な驚きもたらされた。何度か読んだことのある段が今までとは違った姿で現れてきたりしたからである。

そして、雨夜の品定めという男同士の長々とした女性談義が、広く人間一般の問題にも通ずる形で締め括られている、ということからは、『源氏物語』の持つ視野の広さとともに、場面や状況の作り方の特徴などを再認識することになった。さらに、『源氏物語』には、他に絵画論や物語論、薫香論などさまざまな「論」が練り広げられているが、物語の筋立てや作中人物の心理などは別次元のそうした要素をも許容する、物語というものの自由なあり方をあらためて考えるきっかけにもなったのであつた。

そして、この一節は、一般論として通用することはもちろんだが、研究に携わる者にもある種の警鐘を鳴らしている。いかなる学問も、その専門領域を深めてゆけ

ば、どんどんと世界が広がってゆく。すると、研究者は、その世界に自足し、悪くすると、自分の関わる専門領域が世界に対して優越的な位置にある、と勘違いしがちである。しかし、専門分野の深い知見といえども、それは学問や社会、ひいては世界全体から見れば、「わづかに知れること」なのである。一見華やかに見える学問的な言説が、その実、意外に中身に乏しい、ということはいさしもある。その反対に、「わづかに知れること」をわきまえた抑制的な言説に、真に深みのある内容が湛えられていることも少なくない。そのような謙虚で相対化した眼に支えられてこそ、「わづかに知れること」同士が手を携えて、良質の学問が輝きを放つものとなるだろう。



『徒然草』



『源氏物語』帚木巻

日々の様々な「文」を見渡す

日本文学科准教授 大江 元貴



二〇二五年九月十五日に開催された国立国語研究所のELW (Evidence-based Linguistics Workshop) サテライトワークショップ「節とは何か、文とは何か？」に、発表者として参加した。おそらくどの分野にもあることだろうが、研究分野が成熟・拡大するほど、それまで確固たるように見えていた基本概念の輪郭が次第に不明瞭になってくることがある。文法研究の基盤となる「節 (clause)」や「文 (sentence)」という概念もその例外ではない。「節」「文」をどのような存在として

捉えると、日本語の文法現象をより深く、リアルに理解できるかー改めて問い直してみようというのがワークショップの趣旨であった。

典型的な書き言葉だけを見てみると、「文」が何者かを語るのとは容易に思える。表記上は前の句点から次の句点までの範囲であり、文法的には「学生が本を買った。」のような主語・述語が揃ったものを基本的に考えれば良い。他方、話し言葉に目を転じると、「蛇！」のような一語だけで驚きを表出するような発話や、「十時に予約した者ですけど」のように従属節だけで完結する発話も珍しくない。これらは状況に依存する形で「語」や「従属節」が文になっている例である。書き言葉の世界にはない文の様相が、話し言葉の世界には広がっているのである。さらに、書き言葉と話し言葉という対立だけでなく、発話場面ごとに

文の構築パターンが異なることを思わせる事例がある。次の例は、国会における政治家の発言の一部である。

(1) それで「昨日の新聞報道でも、総理の自分に裏金が渡っている、こういう記事が出ておりました。(第一七四回国会 二〇一〇年三月三二日)

(2) 賃金引上げ、これはもう総力を挙げてやらなきゃいけないし、総理もよくおっしゃっているとおり、物価上昇を上回る賃上げがあつて経済の好循環、それは私も共通認識です。(第二七回国会 二〇二五年六月十一日)

傍線部は「総理の自分に裏金が渡っている」という記事や「賃金引上げは」といった具合に、もともと簡潔に言えるところを、「こういう」「これ」などの要素を挟み込むことで音声的・文法的な切れ目が作られている。国会議事録にはこの種の、こまめに分割して文を構築する発話が頻繁に現れるが、日常会話ではあまり観察されない(「朝ごはん何食べました?」と尋ねて、「今日の朝ごはん、それはパンケーキでした」などと返ってきたら少しギョツとする)。このような文構築を行う背景

には、「言質や揚げ足をとられないように細かく区切りながら慎重に話したい」「キーワードになるところで区切りを入れ、聴衆やメディアに訴えたい」といった動機が窺え、討論や演説を身体化させた政治家たちの「呼吸」が特有の文を形作っていると見ることが出来る。

このように、「文」のあり様は書き言葉と話し言葉、また日常会話と国会論戦でも異なり、日本語社会を構成する多様な話者、多様な場面を広く観察することの重要性を示唆している。この数年私は、「文」や「文法」は従来の文法研究が想定していた以上に、私たちの社会様式や行動様式を具体的に反映しているのではないかと、という問題意識に駆動されて研究を行っている。少し大袈裟に言うくと、抽象度の高い文法記述でとりこぼされてきた「人間臭い」「ビビッドな」現象を拾い上げつつ、新しい文法像を描き出す試みとでも言えるかもしれない。残念ながら今はまだその全体像をここで端的に語る言葉を私は持ち合わせていない。数年後の「研究余滴」でその成果を具体的に語れるよう引き続き歩を進めていきたい。

源氏研究との出会い

日本文学科准教授 山口 一樹



前号の「随想」記事を執筆された韓先生にならない、ここでは私も専門として学んでいる『源氏物語』との出会いについて振り返ることにしたい。『源氏物語』にはじめて触れたのは、高校以前の古典の授業であつたと思うが、全く記憶にない。当時は興味を引かれなかったのだと思う。大学に進学してからも、ご指導いただいたのは中世の影響もあつて、読んでいたのは中世の軍記物語であり、『源氏物語』について学ぶようになったのは、三回生になつてからであつた。軍記のように人の血

が流れない世界。それでも作中に現れる人々は、皆何かに悩みながら生きていく。それまで親しんでいた作品とは違った世界を新鮮に感じつつ、私は『源氏物語』そのものの面白さはもとより、『源氏物語』研究の面白さに惹かれていった。

源氏研究の魅力は、その論文数の多さにあると思う。戦後活発化した作品研究は、多種多様な手法が試みられながら論文が量産され続け、現在に至っている。そうした研究の歩みの中では、物語の同じ箇所を取り上げていても、異なる解釈が行われている、といったことがままみられ、この点が私には興味深く感じられた。例えば、玉鬘十帖の結末をめぐる諸説が挙げられる。玉鬘とは、光源氏の恋人夕顔の遺児にあたる女君である。玉鬘と再会した光源氏は自邸六条院に養女として迎え取り、多数の求婚者を集

める一方、自身も女君に懸想するようになる。しかし結末部では、有力者だが無骨な鬚黒が光源氏の意に反して玉鬘に通じ、妻としてしまう。この事態について、『無名草子』は「いといぶせく心やましき」と評しており、読者がまず抱くであろう不満を率直に伝えている（*1）。一方、森一郎は、玉鬘が鬚黒と結ばれる事態を必然的な帰結と説いており、玉鬘と鬚黒の結婚により養父の光源氏は「権勢上の利益」を得るとして、その婚姻を「源氏の栄華の物語」に「参与」するものと論じている（*2）。このように物語の結末を光源氏にとって有益なものとする論があるのに対し、否定的な意義を見て取る論もあつて、伊藤博は、鬚黒が玉鬘を妻とする事態について、物語が光源氏の意向から独立した「他者」によって推し進められていることを示すものであるとし、光源氏が物語の宰領者たり得なくなる第二部の世界の萌芽の一端として捉えている（*3）。森・伊藤の論に批判を加えた論もそれぞれにあり、玉鬘が鬚黒と結ばれる結末をいかなるものとして読み解くかは、容易には決したい魅力的な問題として残されている。

教室で『源氏物語』を読んでも、学生たちは様々な感想を伝えてくれる。現実には光源氏がいたら理想の恋人になつただろう、と言う者もいれば、光源氏と出会っても絶対に自分は恋をしない、と言う者もいる。同じ物語を読んでも、違つた感想が出てくるのは、当人がどのような経験や価値観を有しているのか、要するに、どのような人であるのか、ということと関わっているのだからと思う。であれば、その人だからこそ抱く作品への思いというのが様々にあつて、その分物語の新たな「読み」は見つかっていくのだろうと思う。豊かな先学の教えに導かれつつ、自分なりの解釈を模索しながら作品と向き合っていきたい。

*1 引用は、樋口芳麻呂・久保木哲夫校注訳『新編日本古典文学全集40 松浦宮物語・無名草子』（小学館、一九九九年）に拠る。

*2 「玉鬘物語の構想について」（『源氏物語の方法』桜楓社、一九六九年、初出一九五八年）

*3 「野分」の後——源氏物語第二部への胎動（『源氏物語の原点』明治書院、一九八〇年、初出一九六七年）

日本文学会春季大会

青山学院大学日本文学会では、毎年、恒例行事として春季大会あるいは秋季大会を開催しています。大会では、日本文学科に在籍する大学院生による研究発表や、日本文学科に設置されている各専門分野に関連する研究者や著名人を招いた講演を行っています。

〔研究発表①〕

近松の心中物『卯月紅葉』および『卯月の潤色』の考察―主人公たちの造形に関して―

博士前期課程一年 安家 公子

二〇二五年六月二十八日、青山学院大学日本文学会春季大会で「近松の心中物『卯月紅葉』および『卯月の潤色』の考察―主人公たちの造形に関して―」と題して研究発表を行った。この二作品は、大阪で実際に起きた古道具屋の娘お亀と養子婿与兵衛の心中事件を、近松門左衛門が脚色した世話物浄瑠璃である。夫婦が心中に至るまでを描く『卯月紅葉』と、死ぬことができず一人生き残った与兵衛の後追い心中を描く『卯月の潤色』で前後編のような作りになっている。

『卯月紅葉』において、夫婦は

共に若年で内面的にも幼稚な造形がなされている。与兵衛は関係の悪い舅から何度も「隠れる」姿が描かれ、讓状を盗むなど浅はかな行動を繰り返し、変化することがなかった。対して、元々心中への傾倒が見られたお亀は、『卯月紅葉』上之巻では本心を言えず、よく泣くという造形がされていた。中之巻で伯母の来訪ともたらされる緋縮緬を契機に、下之巻でその性格が一変することが読み取れる。お亀に「大人役」としての自覚を持たせた伯母と、〈死〉を象徴する緋縮緬は、お亀に成長、すなわち心中への覚悟という変化を生ませたのである。こうした幼さからの変化の有無が夫婦の死の捉え方を分け、幼稚なままであった与兵衛は生き残ってしまったと考

察した。

『卯月の潤色』で、与兵衛は「出家」をしたが「知識、知者の身でもないことを客観視できるようになっている。幼さから脱却し、死への覚悟を持つことで後追い心中を果たすのである。

本発表では以上のように、夫婦がなぜ心中に至ったのか、そしてなぜ与兵衛だけが生き残ってしまったのか、さらにそこから、近松が一つの心中事件を二作品に分けた意味を、夫婦の造形を分析することで明らかにした。

〔研究発表②〕

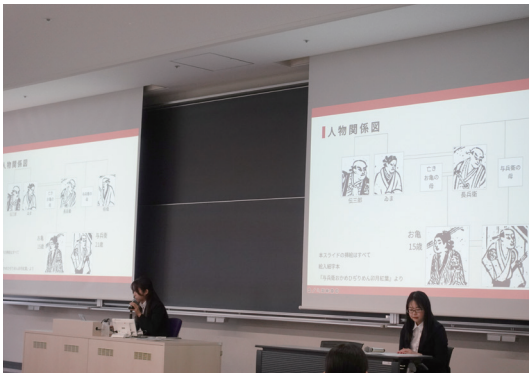
川端康成『美しさと哀しみと』論―掲載誌『婦人公論』との関わりから―

博士前期課程一年 蜜澤 杏夏

二〇二五年六月二十八日、青山学院大学日本文学会春季大会にて「川端康成『美しさと哀しみと』論―掲載誌『婦人公論』との関わりから―」と題して口頭発表を行った。

本発表では、一九六一年から一九六三年にかけて婦人雑誌『婦人公論』に発表された川端康成の長編小説『美しさと哀しみと』を研究対象として、掲載誌である『婦人公論』と『美しさと哀しみと』との密接な関係を指摘した。

『美しさと哀しみと』の特徴として、音子とけい子という二人の女性間の性的接触が描かれているばかりか、男性が主人公として置かれながらも結末に向かうにつれて主人公を含む男性たちの存在が後退し、女性たちの姿が前面に出るという点が挙げられる。そのような女性の欲望が中心化されていく物語の特徴を鑑みると、連載誌が婦人雑誌であったという背景は



『美しさと哀しみと』を研究する上で不可欠の視点であろうと考えられる。以上の問題意識から、『婦人公論』という掲載媒体の磁場の特色を認識した上で、特に音子とけい子という二人の女性同士の性的接触を背景に女性の「脱毛」が行われる場面を取りあげて読解を行った。

音子とけい子の女性同士の関係を読むと、二人の関係は異性愛の「再現」にのみ留まらず、異性愛／同性愛というカテゴリーに振り分け切ることのできない、複雑な引き裂かれの中にあると考えられる。本発表の読解では「脱毛」の場面におけるけい子の脱毛行為と音子の心情に着目した。今後は、女性たちの心情や在り方の揺らぎが繊細に表象されている『婦人公論』という媒体に発表されたことに意味を見出し、引き続き女性たちの描かれ方に着目して物語全体を論じたい。



〔研究発表③〕

司馬遼太郎の描く共同体―サラリーマンの「秩序」から日本の「懐かしさ」まで―

博士前期課程二年 矢口 楓

二〇二五年六月二十八日、青山学院大学日本文学会春季大会で「司馬遼太郎の描く共同体―サラリーマンの「秩序」から日本の「懐かしさ」まで―」と題して研究発表を行った。

司馬遼太郎はこれまで「日本人」を論じてきた作家として評価されてきた。その理由の一つには、司馬自身が作品の執筆動機を、戦時の日本人に絶望した「二十二歳の自分への手紙」と位置づけてきたことが考えられる。しかしながら、こうした説明は一九九〇年頃からなされたものであり、それ以前の司馬の作品には、「日本人」という規模ではない共同体が主題として読み取れる。

新聞記者時代の司馬は『名言随筆・サラリーマン』を通して、会社というシステムにおける「秩序」を保つことへの期待を書いた。また一九六〇年に直木賞を受賞した『梟の城』では、新聞記者という



自身の職業と作中の忍者との間に「虚無主義」という共通項を見出していた。

「日本人」という主題が明確に見出されるようになるのは、一九七一年から連載される紀行文「街道をゆく」においてである。この連載は司馬が没する一九九六年まで続き、「日本人」をはじめとする「民族の原型」の探求を目的としている。作中では紀行先の風景や文化に対して司馬が感じた「懐かしさ」への言及が見られるが、それらが主に韓国や台湾、モ

ンゴルなどかつて日本の支配が及んだ場においてなされていることは見過ごされるべきではないだろう。また作中では、「日本人」が内部でのみ理解される「文化」で結びついた集団であるとした上で、「われわれ日本人」という表現が多用されており、「街道をゆく」はある種の共通性を喚起するテクストであるといえるだろう。

〔研究発表④〕

村上龍文学出発点としての『限りなく透明に近いブルー』論―腐ったパイナップルとポプラの波打ち際―
博士前期課程二年 坂本 雛美

村上龍は、日本文学においてポストモダンの潮流の一端を担った作家として評価され、彼の作品もまた「近代代」の立役者的に読み取られてきた。『限りなく透明に近いブルー』はそんなポストモダンの流れの中で、自意識が解体された没主体的文学と解釈された。本発表は、自意識の解体された没主体的文学であるという読みに対し疑義を申し立て、回想と現

実が入り混じるような文体を再解釈することで、本作が主人公リュウの自意識によって構成された物語だ、という新たな読みを提示するものである。

主人公リュウが目前の風景から着想を得た幻想の箱庭を空想するように、リュウの一人称視点で語られる物語は、カメラのように映し出される現象とリュウの回想を混ぜ合わせて構成されている。リュウは、虫を潰すように自己を破壊し、内部と外部を隔てる枠組みを切開きたいという欲求を持つ人物であるが、最終幕において閉鎖的枠組みを作り出す存在としての「黒い鳥」から逃れることを諦め、「鳥」による支配下に停滞することを選んだ。本発表では、作者としてあとがきに登場する（現在）のリュウの存在に着目し、物語中でリュウの脱出を許さず、変わらぬ「日常」の中にリュウを閉じ込めた「鳥」の正体とは、創作者として登場する（現在）のリュウではないかという新たな読みを提示した。この物語は、（現在）リュウの自意識によって秩序化されているのだ。以上のような解釈によって、（現在）のリュウが（過去）

のリュウを物語中に閉じ込め、（過去）リュウはその物語中で、幻想の箱庭を作り出すという自意識の入れ子構造が露呈されるだろう。「限りなく透明に近いブルー」は、徹底的にリュウの自意識によって閉じられた自閉的空間だったのである。



春季大会講演印象記

土方洋一先生（青山学院大学名誉教授）

『伊勢物語』の背景

博士後期課程二年 内野 晴菜

二〇二五年六月二十八日、青山学院大学日本文学会春季大会が開催された。今年度の本大会では、本学名誉教授の土方洋一先生によるご講演が行われた。従来とは異なる視点で『伊勢物語』の背景を読み解く本講演内容について、紹介させていただく。

本講演の研究対象は、『伊勢物語』のうち、特に男主人公の「東下り」に始まる東国紀行の章段群であった。主人公の男が都を出立し、住むべき国を求めて東へ進んでいく内容は、主人公のモデルとされる在原業平の実生活と重ねて考察されてきた。この見方を踏まえたうえで、土方先生が提示されたのが『伊勢物語』の「背景」の謎である。すなわち、『伊勢物語』の内容を業平の体験と捉えて読解することは適切であるのか、という問題提起である。そして、この

問題を解消する糸口として本講演で新たに提唱されたのが、原型『伊勢物語』としての屏風歌の存在可能性である。

本説を補強する資料として、『古今和歌集』二九三番歌（素性法師）・二九四番歌（業平）がまず挙げられた。当該歌の詞書には、「二条の後の御息所と申しける時に、御屏風に竜田川に紅葉流れたるかたを描けりけるを題にてよめる」とあり、二条の後・藤原高子の命令で詠まれた屏風歌の存在が確認できる。そして、そこで詠まれた業平の「ちはやぶる…」の和歌は『伊勢物語』一〇六段では「昔、男、親王たちの逍遙したまふところにまうでて、龍田川のほとりにて」との文章が付され、主人公の実体験の中で詠まれたものと語られている。このことから、『伊勢物語』が作成された「背景」に、業平た



ち歌人に斬新な和歌を作成させた藤原高子の存在を想定できるとい

う。さらに、高子が男性官人に題を与えて和歌を作らせた例として、他に『古今和歌集』八・四四五番歌（文屋康秀）や三五一番歌（藤原興風）、『後撰和歌集』一番歌（藤原敏行）が示された。その中でも、『古今和歌集』三五一番歌は「后の宮の五十の賀奉りける御屏風に、桜の花の散る下に、人の花見たるかた描けるをよめる」とあり、高子周辺での屏風歌の実例といえる。土方先生は、右の歌群と『伊

勢物語』との間に「共通するトーン」があると説かれた。しばしば、『伊勢物語』に見える高子の存在は、業平との実際の恋愛事情として捉えられる。対して土方先生の説では、高子と男性官人として形成していた文学圏を想定し、屏風歌を起点として『伊勢物語』が発展的に創造された可能性が強調されたのであった。

なお、右のように『伊勢物語』の「背景」を考察するうえで重視されていたのが、当時の業平の官僚としての不遇さである。土方先生は、業平が望ましい栄達を遂げられずにいたために、自身の支援者となり得る高子に接近し、屏風歌として、不遇な男の歌を献上したのだと説く。屏風歌として表象された男主人公の不遇さは業平の実情と重なり、高子をはじめとする屏風歌享受者の同情や共感を呼び、支持を獲得した。そして、このような「背景」をもとに、現在まで読み継がれる『伊勢物語』へと成長したのだと結論づけられたのである。

以上、講演内容の要点を述べてきた。土方先生のご講演は、本学で講義を行っていた当時と同じよ

うに、聴講する誰にとつても分かりやすい柔軟な語り口でありながら、鮮やかに新見を示されるものであった。『伊勢物語』の「背景」という研究史の厚い領域で新見を提示された本講演内容は、青天の霹靂と感じられた。考察され尽くしたと思しい研究領域でも、文学史を縦断する豊かな知識や斬新な発想力が新たな発見を導くことをお示しくくださった土方先生のご講演は、すべての聴講者が刺激を受けて貴重な機会となったと確信している。



第六十号 目次

巻頭随筆 日本文学会会長

高田 祐彦 2

研究余瀆

日本文学科准教授

大江 元貴 3

随想

日本文学科准教授

山口 一樹 4

日本文学会春季大会

研究発表①

研究発表②

研究発表③

研究発表④

講演印象記

アイケ・ロッツ先生講演会

松田青子文学フォーラム

日本文学特講Ⅱ [5]

平曲実演

研究室探訪

〜田中里奈先生編み

みなさんへのメッセージ

就職活動（公務員・教員）

大学院に進学して

夏期集中講義報告

留学生の動向

学生の連句作品紹介

今年度の学生の活躍

日本文学科関係図書

新取貴重書紹介

院生部会報告

日本文学科同窓会から

二〇二五年度講義題目

研究室だより・編集後記

24 20 20 19 18 18 18 17 16 16 15 14 12 11 10 9 7 6 6 5 5 4 3 2

講演会

アイケ・ロッツ先生（オスロ大学教授）

現代社会における「鯨信仰」… ベトナムと日本の鯨祭祀をくらべて

順天堂大学 スポーツ健康科学部 准教授 杉山 和也

二〇二五年一月一九日、アイケ・ロッツ (Aike Peter Rots) 先生の講演会が開催された。日本文学が主催で、国際化推進機構の協力とノルウェー大使館の後援を得た。コメントーターは英米文学科教授の結城正美先生と日本文学科の武内佳代先生、司会は稿者が務めた。ロッツ先生は、オスロ大学人文学部文化・宗教およびアジア・中東研究学科の教授で、日本・ベトナム・沖縄・アイヌを中心に近現代アジアにおける宗教・文化・社会について研究している。著書に「鎮守の森」について独自の視点から研究を行った『現代日本における神道、自然、イデオロギー―神聖な森を作る』（二〇一七）などがあり、二〇一九年からは欧州研究会議のプロジェクト「力の鯨―海域東アジアにおける海洋哺乳類・儀礼実践・環境変化」を主

宰している。今回の講演も、このプロジェクトの研究成果に基づくものだが、日本語で報告されるのはこれが初めての機会であった。ロッツ先生は、国と国を比較する「国際比較」ではなく、国を超越した「トランスナショナル」な視点を重視しているのだという。そのことを確認した上で、ベトナム中南部におけるクジラ崇拜について評述した。この地域では、クジラやイルカは「カ・オン（お爺さん魚）」と呼ばれ、人間を救う守護神として厚く信仰されている。それは単なる動物ではなく、仏教の観音様の使い、あるいは海の神様の現れ（垂迹のようなもの）と見なされているのだという。また、海岸に漂着したクジラには人間同様の葬儀が行われ、数年後に掘り出された遺骨は霊廟に祀られる。歴史的には、一九世紀の阮朝

の嘉隆帝が、自身を救ったクジラを国家の守護神として公式に認定した。現代では民間信仰として生き残り、政府からも無形文化遺産や観光資源として注目されている。しかし、漁師の減少や環境問題といった課題にも直面しているのだという。これに対して、日本については、クジラを豊漁を導く「エビス」として崇める信仰があることや、捕鯨の有無に関わらずクジラを弔う「クジラ塚」の存在などクジラを供養文化が各地に点在しているところに特徴がある。また、両国の共通点としては、民間のアニミズム的要素が仏教、特に観音信仰と深く結びついていることが指摘された。

講演後、コメントーターによるコメントと、フロアからの質疑が行われた。結城先生は環境人文学の立場から、ベトナムの祭祀で供え物のプラスチックが海へ投棄される実態に触れ、伝統的自然観と現代の環境意識が乖離する「近代と非近代のパラドックス」を指摘。武内先生からは、脱国家的な視点で評価した上で、クジラにまつわる祭祀における男女の役割分担や、クジラと関わりの深い観音信



仰に見られる女性的イメージなど、ジェンダーの問題について質疑があった。加えて、フロアとのやりとりとしては、日本文学の小松靖彦先生から「文学的テーマとしてのクジラ」と「バイオリージョナリズム」の二つの観点から重要な問い掛けがあった。これまでの環境人文学が陸中心であったことを踏まえ、海を中心とする「ブルー・ヒューマニティーズ（青い人文学）」という動きとの関連性についても触れ、議論を深めた。それぞれの専門の立場から様々な論点が提示されたが、そのこと自

体がクジラの学際的、国際的なテーマとしてのポテンシャルを示しているとも言えるだろう。今回の講演会の内容は書籍として刊行

される予定である。今回の画期的な議論が広く共有されることを期待したい。

日本文学科主催フォーラム

松田青子文学フォーラム―「彼女」たちの労働・クイア・ケア

博士後期課程二年 三上 桜

松田青子は既存のジェンダー規範への批判的精神を強く打ち出した作家であり、多くの女性たちから共感されその背中を押してきたにも関わらず、国内では目立った研究成果が見られないという現状がある。一方で、翻訳を背景に海外では注目度が高く研究論文も出されている。そこで、本フォーラムでは、海外でご活躍されている研究者の方々をお招きし、松田文学の可能性を拓くことやクイア、翻訳の観点から現代女性作家の作品をハイブリッドに読み解く方法を考える機会となった。

フォーラムは二〇二五年一〇月二三日に行われ、三名のご発表の後にディスカッションを行い、最後に会場・オンラインでご覧の皆様から質問をいただく形式で進められた。事前登録には百名程の申し込みがあり、会場には三十名程の来場があった。一人目の発表は、一〇月から本学に客員教授として滞在しているトリノ大学のダニエラ・モロ先生である。ダニエラ先生は『スタッキング可能』（二〇一三年）をもとに、作品内の「職場」の中で人々がどのように描かれているかご発表された。作品の登場人物たちは、他者をスタンダードと見做し、反



フォーラムには海外で活躍する研究者3名が登壇

対に自らを社会的規範に沿わない異質（あるいは特別）な存在として認識することで疎外感を抱くという点で共通しており、その「規範」との争いとしてこの作品が描かれていると論じられた。次の発表は、四月から二年間、フォーラムの司会者である武内佳代先生のゼミに大学院研究生として所属されるクイーンズランド大学のニックス・サフランさんである。『おばちゃんたちのいるところ』（二〇一六年）に収録されている「ひなちゃん」という作品に

ついて、インターテキストの観点からクイア表象の捉え直しを行っていた。「ひなちゃん」は「骨つり」という落語を描き直した作品だが、原作は男女の性愛を前提としているのに対し、「ひなちゃん」は女性同士の関係が強調されており、そこに、サフランさんは異性愛規範から逸脱するクイアの可能性を見出していた。またクイア表象にネガティブな意味を読むのではなく、希望を込めた前向きな語り直し・解釈をすることの重要性を示されていた。

三人目は、松田文学研究者の一人である松田作品のスペイン語の翻訳者でもある、オックスフォード大学研究員のフリーアナ・ブリテイカ・アルサテ先生である。フリーアナ先生は『おばちゃんたちのいるところ』の「彼女ができること」で語られる子育てを通じた女性たちの関係性に着目し、そこに女性たちのケアする／されるという二項対立を解体する相互依存的なケアの在り方を見出していた。ディスカッションでは、本学の佐藤泉先生より、松田作品の文体について意見が出された。同じ言葉を反復することが松田作品の特

特別講義

日本文学特講Ⅱ「5」 平曲実演

日本文学科准教授 滝澤 みか

徴であるが、一つの言葉が個別的でありながら画一的なものとなり、反復によって差異化と同時に同質なものの紐帯の可能性も拓けるのではないかという鋭い指摘であった。法政大学のレティツイア・グアリーニ先生からは、松田作品が示すジェンダーに関する差別や暴力は国境を越えて共感される事柄であることや、翻訳家同士や翻訳者と作家による繋がりについての問題提起がなされた。

以上、本フォーラムをまとめると、全てに共通するキーワードは「連帯」であった。三名のご発表は、社会の中で苦悩を抱えて生きる女性たちの助け合いや、社会規範に囚われながらもそれによって繋がりが合う人々についての論であった。加えてデイスカッションでは、その曖昧さが魅力でもある松田作品の「ことは」を翻訳する者同士の助け合いがあることも言及された。本フォーラムを経て、今後さらに作品内の「彼女」たちのような繋がりを必要とする全ての人の明るい未来へ向けた連帯が生まれていくことを願っている。

二〇二五年度の「日本文学特講Ⅱ「5」」では軍記物語の享受に焦点を当てて、関連する作品や資料を読んでいく。その授業のゲストスピーカーとして、新潟大学名誉教授の鈴木孝庸先生をお招きし、平曲の実演をお願いさせていただけることになった。鈴木先生のご演誦は出身大学の学会で最初に拝聴し、以降も何度か何う機会に恵まれ、このたび青山学院大学にもお越しくださったことになった。

『平家物語』は他の古典文学作品と同様、写本や版本で読まれてきたが、また一方では平曲の形でも享受されてきた。現代ではその伝承者は少なくなっているが、鈴木先生は研究者かつ演誦者でもあるという稀有な存在である。

当日は平曲の解説や、語りの伝承の系譜のお話、そして「熊野参



詣」奈須与市」をご演誦いただき、最後にはみんなで「祇園精舎」の一節を声に出した。会場のチャールズ・オスカー・ミラー記念礼拝堂は学内で古い歴史を持つこともあり、礼拝堂の木造の壁に鈴木先生の声と琵琶の音が深く美しく響

いていた。

鈴木先生のお話によると、お師匠でいらっしゃる橋本敏江氏もまた、本学に勤めていた田中允先生の招待により、ご演誦されたことがあるという。不思議な縁で、こうしてまた本学で平曲を学生が拝聴出来る機会をいただき、大変嬉しく思う。

なお、会場のお手配いただいた教務課・総務課各位、敷物をお借りしたジェンダー研究センター各位に心より御礼申し上げます。





学生が研究テーマを掴み取ることのできる授業づくり

き来する時間も十分には取れないので、フィールドを日本国内に移しています。横浜市鶴見区や、横浜市と大和市の間にある「県営いちよう団地」、長野県飯田市などをフィールドにしている、沖縄にルーツのある日系人の方や、インドシナ難民の方、中国帰国者の方などに対する聴き取り調査や、日本語教室での参与観察、学習支援などを行っています。

＊研究室ではどのようなことをしていますか？

授業の準備をしたり、本を読んだりしています。でも、研究テーマの関係上、研究フィールドに出してしまうことも結構多いと思います。学習支援の現場に参加したり、インタビュ協力者の方にお話を聴きに行ったり、研究室以外で行かない研究の時間がどうしても必要となるので、研究室にいないことも多いかもしれません。今年着任したばかりでまだ準備段階ですが、授業を履修している学生やゼミ生を連れて研究フィールドに入るということをもっと積極的に行っていきたいと思っています。

＊授業の中で大切にされていることはありますか？

学生たちが自身の問題意識を強く持つことや、自分ごととして日本語教育の問題を捉えることができるような授業づくりを心がけています。知識はとても豊富で日本語教育の概説的なことは色々よく知っているけれど、特に興味・関心がある研究テーマが見つからない、深く突き詰められないという学生にこれまで出会ってきまし

た。自分の研究テーマを見つけ、自分でフィールドに積極的に入っていく、データの収集などをしてほしいと思うので、まずは問題意識を育てて、研究テーマを掴み取るきっかけが授業でうまく提供できたらと考えています。概論の授業などは履修者が百人以上もいて、なかなか主体性を引き出したり、自分の問題として授業テーマを捉えてもらったりするのが難しいと感じることもあるのですが、過去に収集してきたインタビュー事例や映像資料を視聴したり、グループディスカッションなどの協働学習を取り入れたりして、なるべく自分に引き付けてテーマを捉えてもらえるように工夫を試みています。

自分の興味・関心事にたくさん時間とエネルギーを使ってほしい

＊学生にメッセージをお願いします。

自分の興味・関心があることに自由に、そして、徹底的に向き合ってみてください。この間、大学の同期会があったのですが、「仕

事も家事も育児もない大学時代は今よりも時間があったんだから、勉強も活動ももっと色々やっておけばよかったー」と言っている人が本当に多かったです。私も同じように少し後悔しているところがあります。「大学時代は四年間もある」と思うかもしれませんが、あつという間に終わってしまいました。授業に出るのはもちろんですが、授業で自分がおもしろいと思えることに出会ったら、本などを読んでさらに掘り下げて考えてみたい、関連する研究フィールドでの活動に参加してみたりと、自分の興味・関心があることにたくさん時間とエネルギーを使ってもいいと思います。そうしていく中で、視野が広がったり異なる視点から物事が見えるようになって、一生をかけて自分が本当にやり遂げたいことは何なのか、自分に合った仕事や生き方はどのようなものなのかといったことが掴めると思います。

〔聞き手〕

三年 熊井花音
一年 小嶋時子

みなさんへの メッセージ

就職活動

自分の得意を伸ばし
公務員試験を突破

【公務員】卒業生 福島 京佳

私は現在、関東圏で県庁職員として働いています。まだまだ勉強中の身ではありますが、少しでもみなさんの参考になることをお伝えできればと思います。

私はずっと地元で働きたいと考えていたため、大学に入学する前から公務員を目指していました。そのため法学部や経済学部に入ることも考えましたが、せっかくの大学生活を自分の好きな分野の探求に使いたいと思い、文学部に入ることを選びました。

公務員試験の勉強を本格的に始めたのは、大学三年生の夏ごろでした。勉強を始める時期としては少し遅めだったのですが、通信制の予備校に入学して、なるべく効率的に学習を進められるよう心掛けました。公務員試験は科目数が

多いので、自分の得意な科目では確実に点が取れるように、反対に苦手な科目では最低限のポイントをおさえられるようにと、配分を考えて勉強していきました。また、一・二年生のころに教養科目として法学系の授業を取っていたことも役立ちました。自分の専門分野以外の授業も積極的に取っていくと、思わぬところで役に立つことがあるかなと思います。

また、ほとんどの公務員試験では面接が行われます。私は塾講師のアルバイトをしていたので、人前で話すことにそこまで抵抗はありませんでしたが、それでもやはり不安でした。そこで、自分を評価されるに行くというよりも、面接官の方とお話をしに行くという気持ちでいることを心掛けました。もちろん、志望動機や公務員になってやりたいことなど、定型的な質問に対しては返答を考えていきました。しかしそれ以外は、自分が伝えたい気持ちはどんなものかを考え、後はその場の流れに合わせるようにしました。面接官の方とコミュニケーションをとること意識すると、相手の方の印象にも残るのかなと思います。

私は数学や経済関係の科目が苦手で、途中まで本当に合格できるのか不安に思っていました。しかし、公務員試験は単純な学力勝負ではなく、面接や論文試験の結果もふまえて合格が決まるものです。自分の得意な分野を見つけることができれば、少くくらい苦手な分野があっても合格できると思います。もし公務員になりたいという気持ちのある方がいらっしゃったら、ぜひ最後まであきらめずに、自分の得意を伸ばしてほしいと思います。いつか皆さんとお目にかかれることを楽しみにしております。



即戦力が求められる新任教師
大学での学びが財産に

【教員】卒業生 井上 匠

教員として働き始めて半年が経ちました。ついこの間までただの学生だった人間が学校で関わる全ての人から「先生」と呼ばれる訳ですから、日々新鮮さと共に責任の重さと少しの恥ずかしさを感じています。

私は現在、都内にある私立の中高一貫校で勤務をしています。東京都の教員採用試験にも合格していましたが、熟慮の末に今の勤務校で教員としてのキャリアをスタートさせることを決めました。教員を目指す皆さんには様々な選択肢があります。自分が教員となって何をしたいのか、どんなキャリアを歩んでいきたいのかを深く考え、どこで勤務するのかわを決断してほしいと思います。

学校によっても異なると思いますが、教員には一般企業で言う所の「研修期間」は基本的にありません。四月初週から授業を任せられ、一人で教壇に立つことになりました。私は、高一の現代の国語、高二の古文・漢文、中一の国語の計五クラス、週十六コマの授業を受け持っています。この半年間で最も大変だったことは、間違いなく教材研究と授業準備です。ここだけの話、「授業開始の五分前に準備が終わる」などということとは割とよくあることです。授業以外にも校務はたくさんあるので、本当はもっと準備したいけれど八十パーセントくらいの完成度で授業をせざるを得ないということもあ

ります。だからこそ学生の皆さんには、大学での模擬授業の準備や指導案の作成を一回一回大切にやって欲しいと思います。時間をかけて教材に向き合うという経験は、間違いなく皆さんの財産になります。ぜひ楽しんで勉強してください。

授業と同じくらい難しいと感じていることとして「生徒指導」があります。高校生とはいえまだまだ子どもですから、生徒は多くの間違いを犯します。時に叱ることもありますが、大切なのは「生徒のことを想っているか」と思います。子どもは大人の考えや気持ちを敏感に察知します。自分のことを想っていると感じてくれれば、厳しいことを言っても素直に聞いてくれますが、ただ一方的に怒っているだけだと感じると反抗したり話を聞いてくれなくなったりします。これから教育実習に行く方は、指導教員がどのように生徒と向き合っているのか、ということをよく観察して欲しいと思います。

教員は毎日が勉強です。生徒に学びを伝える訳ですから、先生はそれ以上に沢山のことを学び続け

なければなりません。皆さんが生徒のために懸命に努力できる良い先生になってくれることを切に願っています。

大学院に進学して

博士前期課程一年 北村 結子

先生方と校内を歩きながら、そろそろ銀杏が美しく色づく季節なのだということを感じるとともに、大学院に入学してから早くも数か月が経過したという現状を感慨深く思います。時間がただ過ぎ去っただけだと思わないのは、入学してから様々なことに出会い、経験し、学ぶことが出来たためだと思っています。それぞれに個性を持つ授業への参加に加え、授業外における先生や先輩方との交流、そして自身が関心を持つ分野を学ぶことができる学生生活のおかげで、一日一日が実りあるものに感じます。

前期の生活を思うと、学部生の時よりも発表回数が増え、それと同時に他の方と議論を行う機会や時間も増えていたように思います。各発表に対して、計画を練り、

それぞれに時間を費やすことができるように取り組んでいました。発表後には先生方と議論する時間が設けられており、多くの知識や視点、改善点を学ぶことができました。反対に、発表を聞く機会も多くあるので、他者の発表を聞くことや議論を行うことが楽しい、という人にも魅力的な日々だと思っています。

また大学院では、改めて研究について考えることができると思っています。私が学んだことは氷山の一角にも及ばないと思われませんが、多種多様な領域や研究テーマがあり、奥深さや範囲の広さが見られ、方法があり、機会があり、可能性があり、研究者の方がいらっしやって、各自の苦労と努力がある、というように学部生の時に見てきた学問や研究とはまた異なる世界を知りました。そのような院での学びが、授業内のみならず、日常生活における日本文学ではないテーマに向き合うような折口となってくれているように感じられます。

未だ自分の勉強に関しては課題が多くあり、発表毎に反省すべき

部分があり、気分が落ち込む時も多々あります。ですが、授業でもその他においても先生や先輩方、友人に会い、話をしたり、共に学ぶことで、落ち込む必要がないことを知ることが出来たり、パワーをいただけたり、優しさにほっとしたり、共に学ぶ有難さを胸に楽しく学ぶ日々を送ることもできています。学ぶ楽しさを噛み締めつつ、これから先も勉強を続けていきたいと思えます。大学院で学ぶという点に関してご参考になりましたら嬉しく思います。



夏期集中講義報告

アイヌ語、体で覚える言語学習で
得た気づき

二年 齋藤 莉奈

今年度は藤田護先生より、日本の先住民言語であるアイヌ語について学んだ。言語そのものの構造から口承文学、さらに現代における言語再活性化の動きまで幅広く扱う内容であった。

特に心に残っているのは、アイヌ語の発音練習の時間である。授業ではまず先生が手本を示し、私たちがそれを繰り返す形で練習した。その際、先生は「アイヌ イタク パテク アイエ ロー！（アイヌ語だけを言いましたよ！）」と声をかけ、アイヌ語とジェスチャーだけで指導を進められた。また、文字を見ることがメモを取ることは禁止され、耳だけを頼りに発音を聞き取るよう求められた。この方法は最初こそ少し緊張したが、耳に集中することで一音一音の違いを意識でき、音のリズムが自然に体に染みこんでい

くように感じた。練習後に先生から配布された資料で文法的な説明を受けたとき、聴覚で覚えた言葉と文字で見える形が結びつき、より深く理解することができた。まさに「体で覚える言語学習」という感覚だった。

また、アイヌ語の口承文学を実際の語り手の音声で聴く機会もあった。アイヌの物語は大きく「神謡」「英雄叙事詩」「散文説話」の三つに分けられるが、その中でも「神謡」は韻文で語られ、サケヘ（リフレイン）を伴うという特徴がある。音声の中で語り手がリズムよく「サケヘ」を唱えるたびに、心地よい響きが教室全体に広がった。意味を完全に理解しきれなくても、語りのリズムや声の高低から感情の流れが感じられ、文字だけでは決して伝わらない「声の文学」の力を実感した。

さらに、「危機言語としてのアイヌ語の現状と再活性化」を扱った回も深く印象に残った。アイヌ語は21世紀初頭に流暢な話者の最後の世代を失い、家庭内での伝承がほとんど見られなくなったという。しかし一方で、若い世代がデジタルアーカイブを活用してアイ

ヌ語を学び直し、日常生活の中に取り戻そうとする動きがあることも学んだ。言葉を守ることは、単に過去を保存することだけではなく、文化を未来へつなぐ営みでもあると実感した。そして、「一人でもその言葉を大切に思う人がいれば、その言葉には意味がある」という言葉が、強く心に残った。全体を通して、これまで遠い存在のように感じていたアイヌ語を、実際に声に出し、物語を聴くことで身近に感じられるようになった。また、失われつつある文化を学び、そして共に生かしていく視点を持つことの重要性を改めて考えさせられた。今後このような講義を通して、言語や文化への理解を深める機会がさらに広がることを願う。



留学生の動向

日本文学科教授 田中 里奈

二〇二五年五月現在、本学の学部在籍している外国人留学生（正規課程留学生および交換留学生）は四五三名で、このうち文学部在籍の留学生は六五名（正規課程留学生四九名、交換留学生一六名）です。日本文学科に在籍している留学生は二九名で、総合文化政策学科の四三名や経済学科の四名に次いで三番目に多く、また、文学部のなかでは最多となっています。今年度は韓国と中国からの留学生五名を日本文学科にお迎えしました。

次に、大学院に在籍している外国人留学生の動向について見ていきます。大学全体としては二四三名の留学生が在籍しています。このうち日本文学研究科博士前期課程には私費留学生が二名、博士後期課程には国費留学生が二名、また、科目等履修生が一名在籍しています。

毎年、本学科在籍の留学生およ

びチューター、担当教員とで文化交流活動が行われています。今年度は六月二五日に大学内のインターナショナルコモンズを利用して、ピザを囲みながら和やかな交流会が開催されました。相場美幸さんを中心に西彩夏さん、新倉楓萌さん、鈴木日菜さん、川口暖佳さんが力を合わせて企画から実施まで進めてくれて、さまざまなお話を語り合うよい交流の機会をもつことができました。留学生が多く在籍している学科として、今後

も留学生との交流を充実させていきたいと思えます。

最後に、今年度のチューターの皆さんからのメッセージです。毎年秋季に国際センターが次年度のチューターを募集しています。留学生との交流に興味・関心がある方がいましたらぜひ応募してみてください。チューターとして留学生の方々との密にかかわる機会をもつことで、新たな気づきや学びもきつとあるはずですよ。

チューターとして私自身にとっても貴重な経験をする事ができました。留学生が日本の生活に少しずつ慣れていく様子をそばで

見守ることができ、大変充実した日々でした。また留学生の豊富な知識に刺激を受け、私も頑張る力となりました。今後も留学生たちが日本で充実した日々を過ごせることを願っています。1年間ありがとうございました。

(相場 美幸)

普段の学校生活ではあまり関わりがありませんでしたが、チューター活動を通して留学生の皆さんと知り合うことができてとても嬉しかったです。留学生の皆さんとの関わりの中で様々な価値観や文化の違いを知ることができました。また、意欲的に学ぶ姿勢にとっても刺激を受けました。チューターとしての経験はとても有意義なものとなったと感じています。

(新倉 楓萌)

チューター活動を通じて、留学生の方々との交流する貴重な機会に恵まれ、大変嬉しく思っております。留学生の生活や価値観に触れることで文化的差異への理解が深まり、多面的な知識に触れたことは非常に刺激的でした。本活動を通して、自身の学びにも大きな広がりが生まれたと感じております。

(西 彩夏)

学生の連句作品紹介

日本文学教授 大屋多詠子

二〇二四年度の夏期集中講座

「日本文学特講A」では、日本連句協会理事の鈴木千恵子先生が連句についてご講義下さいました。その報告は前号にも掲載されていますが、連句の実作が令和七年六月刊行の『連句年鑑』に掲載されましたので、以下にご紹介します。

日本文学特講A

脇起り『灰汁桶の』（表六句）

グループ2 鈴木千恵子捌

灰汁桶の雫やみけりきりぐす

凡 兆

風爽やかにしもた屋の蔵

日 菜

月光に照らされた子の影揺れて

百 合 香

鉄棒の手に残る鉄の香

詠 美

工場の脇たくましく鼓草

千 恵 子

帰りゆく鳥迷ふことなく

鈴 菜

脇起り『灰汁桶の』（表六句）

グループ3 鈴木千恵子捌

灰汁桶の雫やみけりきりぐす

凡 兆

木の間に透くる有明の月

優 奈

幼子は栗飯食らふ夢を見て

希

紙の飛行機角合はせ折る

春 菜

岸壁に咲いては散つた波の花

菜 奈

鷹匠鳴らす笛の音の澄み

涼

涼も新たにやはらかな夜

胡 春

月の舟見上げてみれば叢雲に

ひなた

尻尾を垂らす犬と家路を

遙

初山河いつもの景色懐かしく

野 乃

ひゆるひゆる揚がる三角の凧

執筆

脇起り『灰汁桶の』（表六句）

グループ4 鈴木千恵子捌

灰汁桶の雫やみけりきりきりぐす

凡兆

月のまじろむほの暗き土間

瑞生

いそいそと冬支度する影揺れて

望花

くつろぐ猫に欠伸うつされ

愛珠

初景色雅楽の調べ聞きながら

千恵子

羽子板抱へ走り来る子等

尚美

令和六年九月 九日首

令和六年九月十三日尾

（於・青山学院大学17506 教室）

今年度の学生の活躍

【二〇二五年度青山学院大学学業成績優秀者表彰】

◇学部最優秀賞 上田桃華（四年）

◇学部優秀賞 成清友里（三年）、

齋藤莉奈（二年）

◇学部奨励賞 本多達郎（四年）、

CHOI SEOYOUNG（三年）、

大又史子（二年）

◇大学院最優秀賞 藤本まどか（二年）

【第四回「青山俳壇」（青山学院）

◇大学長賞 新堀笙子（一年）

「枝豆のように言葉を押し出だす」

【皇室の恒例行事「歌会始の儀」

◇歌会始 入選作 新堀笙子（一年）

「真つ青な葉紐あり文明は川より生まれ出づるをおもふ」

二〇二四年一月から二〇二五年一月までに出版された日本文学専任教員（旧教員も含む）、日本文学科卒業生および大学院日本文学・日本語専攻修了生が出版した、日本語・日本文学・日本語教育・中国古典文学等に関する図書を紹介します。未掲載の図書については情報をお寄せください。

【二〇二五年】

◆土方洋一「オトナのための古文

再チャレンジ」（青簡舎、三月）

◆吉田昌志「泉鏡花年譜」（昭和女子大学出版会、四月）

◆小松靖彦・田中祐輔編著『翻訳新論 日中の文字とことばの（近さと遠さ）を考える』（文学通信、六月）

◆秋元美晴・上原真知子・入江香寿美・平岡守・安富由起子『日本語の助詞とよくある表現 Japanese particles and common expressions』（ナツメ社、九月）

二〇二四年六月〜二〇二五年六月までに日本文学科で購入した古典籍を紹介いたします。

『訓閲集』（二〇二四年六月購入）093/K203

写。袋綴一冊。軍気巻のみで、五巻合冊。縦一四・一cm×横一九・二cm。江戸中期写か。五十九丁。外題なし。内題「訓閲集」。絵には鮮やかな彩色が施されている。蔵書印「柿之舎文庫」。

『保元物語』『平治物語』（二〇二四年七月購入）093/H15-2 / 093/H20-2

刊。袋綴六冊。縦二五・七cm×横一七・四cm。外題「新版 保元物語」（平治は題簽欠損、後補で「平治物語 三」とある）。「平治物語」の最終巻末に「貞享二乙丑九月吉辰 文台屋次郎兵衛蔵板」とあるように貞享二年版である。筑前の菊池長秋なる人物の旧蔵。書き入れが多く、楽しまれて享受された様子を窺わせる。蔵書印「菊池長秋」「菊池文庫」「菊池」。

『保元平治奈良絵』（二〇二四年七月購入）093/H16

奈良絵本断簡。全十九枚。絵のみ。本文なし。縦二四・七cm×横一七・五cm。江戸前期。絵の質が非常に良いことに加え、これまで確認されている『保元物語』『平治物語』の奈良絵本の諸本とは異なる場面を絵にしている場合があり、貴重かつ重要性の高い資料である。詳細は「青山学院大学文学部紀要67」（二〇二六・三）の拙稿参照。

なお、購入の際に慶應義塾大学の石川透先生にお世話になりました。心より御礼申し上げます。

新収貴重書紹介

日本文学科准教授 滝澤 みか

二〇二四年六月〜二〇二五年六月までに日本文学科で購入した古典籍を紹介いたします。

『訓閲集』（二〇二四年六月購入）093/K203

写。袋綴一冊。軍気巻のみで、五巻合冊。縦一四・一cm×横一九・二cm。江戸中期写か。五十九丁。外題なし。内題「訓閲集」。絵には鮮やかな彩色が施されている。蔵書印「柿之舎文庫」。

『保元物語』『平治物語』（二〇二四年七月購入）093/H15-2 / 093/H20-2

刊。袋綴六冊。縦二五・七cm×横一七・四cm。外題「新版 保元物語」（平治は題簽欠損、後補で「平治物語 三」とある）。「平治物語」の最終巻末に「貞享二乙丑九月吉辰 文台屋次郎兵衛蔵板」とあるように貞享二年版である。筑前の菊池長秋なる人物の旧蔵。書き入れが多く、楽しまれて享受された様子を窺わせる。蔵書印「菊池長秋」「菊池文庫」「菊池」。

『保元平治奈良絵』（二〇二四年七月購入）093/H16

奈良絵本断簡。全十九枚。絵のみ。本文なし。縦二四・七cm×横一七・五cm。江戸前期。絵の質が非常に良いことに加え、これまで確認されている『保元物語』『平治物語』の奈良絵本の諸本とは異なる場面を絵にしている場合があり、貴重かつ重要性の高い資料である。詳細は「青山学院大学文学部紀要67」（二〇二六・三）の拙稿参照。

なお、購入の際に慶應義塾大学の石川透先生にお世話になりました。心より御礼申し上げます。



『保元物語』(二〇二五年一月購入)
083 H77-2

刊。袋綴一冊。中巻のみ。縦
二八・〇cm×横二〇・二cm。元和寛
永中刊。栗皮表紙。五十丁。外題
なし。内題「保元物語巻中目録」。
古活字本。十二行平仮名交じり本。
箱あり。箱には蔵書印(部分欠損)
あり。

院生部会報告

二〇二五年度日文院生部会代表

博士後期課程二年 内野 晴菜

今年度の院生部会に関わる事項
について、以下に報告する。

二〇二四年十月の代表交代の
際、前代表より、COVID・19
の流行によって生じた課題をいく
つか引き継いだ。そのうちで最も
重要視していたのが、異なる専攻・
研究室間の親交である。そこで、
前代表の意志を受け継ぎ、新入生
への声掛けをはじめとした院生同
士の活発な交流を心掛けた。

二〇二五年五月二八日に本学で
開催された日本文学会春季大会で
は、博士前期課程一年の院生二名
(安家公子・蜜澤杏夏)と、同二
年の院生二名(矢口楓・坂本雛美)
が研究発表に臨んだ。特に、新入
生である前期課程一年の二名が、
大学院への入学から一ヵ月ほどで
最初の学会発表を経験されたこと
を心から嬉しく思う。また七月六
日には、奈良女子大学附属中等教
育学校で行われた、日本文学協会
の第四四回大会にて、博士後期課

程の院生三名(下園理紗・三上桜・
内野晴菜)が、研究発表を行った。
それぞれの専門分野は近世・近現
代・中古文学と全く異なるものの、
情報を共有しながら学会に臨んだ
ことは、印象深い出来事であった。
本件に関して、新たに発足された
制度として、国内の学会発表に用
いる費用の援助をいただく運びと
なったことにも触れておきたい。
宿泊費が高騰している昨今、遠方
での学会発表に高額な費用が必要
となる中で、金銭的な不安なく学
会発表へ参加できることは、院生
にとってこの上なく喜ばしいこと
であった。このような制度を設け
ていただいたことへの感謝を忘れ
ず、院生の積極的な学会参加を呼
び掛け続ける所存である。

一方で課題として残ったのは、
院生部会で発行している同人誌
『緑岡詞林』の運営についてであ
る。同誌は、日本文学・日本語専
攻の院生が一つでも多くの実績を
残すという意味で、重要といえる。
しかし、COVID・19が流行し
た期間に変更された規則が上手く
機能しておらず、今年度になって
明らかになった問題がいくつ分か
あった。一つは、雑誌配布の問題

である。また二つは、発行におけ
る費用の問題である。今年度は多
くの論考が投稿されたと同時に、
物価の高騰にともない、雑誌の発
行にかかる費用が例年に比して高
額となった。以上の課題は、部会
での検討を重ねているものの、発
行部数や投稿規則の見直しをはじ
めとした諸問題が検討途中となっ
てしまっている。今後も同誌発行
を滞りなく行うために、一刻も早
い問題解決を目指し、院生主体の
雑誌としての存在意義を守ること
ができるよう努めていく。本件に
ついてご協力を賜っている先生方
には、この場を借りて伏してお詫
び申しあげるとともに、厚く御礼
申しあげたい。

なお今年度も客員研究員の方が
複数名、院生研究室にお越しに
なっている。閉鎖的に行われがち
であった文学研究(特に古典文学)
の研究領域も国際色が強まりつつ
ある昨今において、院生研究室内
で研究員の方と交流が出来ること
は幸甚である。より豊かで意欲的
な院生・研究員間の議論が行われ
ることを願いつつ、次期代表と協
力し、円滑な部会運営の体制を整
えていきたい。

日本文学科同窓会から

日本文学科同窓会会長

松岡 嗣直

日本文学会会員の皆さま、お世話になっております。日本文学同窓会会長の松岡嗣直です。

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。そして新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

日本文学科同窓会も二〇二二年九月に創設されて早くも二十三年となりました。同窓会の目的は①会員相互の親睦、②教養の向上、③大学・日本文学科の発展への寄与、が大きな柱です(会則第2条)。具体的には会報「ひいふうみい」の発行、著名講師や日本文学科教員、卒業生による講演会の開催、九月の大学同窓祭での休憩茶屋「日文の部屋」の開設、春もしくは秋の文学散歩・教養講座などを主な活動としています。

講演会や文学散歩では日本文学科との連携や準会員である現役の日本文学科の学生・院生との繋がりがも大切にしています。卒業生

(一九七〇年～二〇二六年)から在校生まで幅広い校友を対象に、持続可能な同窓会として「わたしの同窓会」となれるよう皆さまの知恵と技術を戴ければ幸いです。

そのような中二〇二五年度は、「ひいふうみい」第19号の発行から始まり、五月二四日(土)には第23回教養講座(向田邦子をテーマとした文学散歩)が開催されました。

その後九月二三日(火・秋分の日)の大学同窓祭には上記の通り、「日文の部屋(17301教室)」で参加し、ゴールドenjジュブリー・シルバージュブリーの方々を中心に盛況でした。「日文の部屋」には日本文学科名誉教授で日本文学同窓会名誉会長の武藤先生が来室され、日本文学科卒業生と歓談し、大いに盛り上がりました。

こういった活動を実行するためには、多くの人の知恵と汗が必要です。仕事や家事の負担にならない範囲で結構ですので、是非同窓会活動にご参加ください。

まずは日本文学同窓会ウェブサイト(下記の二次元コードから入れます)をご覧ください、同窓会のメールアドレスは agumichibun@

yahoo.co.jpまでご連絡戴けますか。会報のバックナンバーをお送りします。

また、入会したい方は左記の二次元コードから簡単に入会できます。宜しくお願い申し上げます。



日本文学同窓会ウェブサイト



同窓会申込フォーム



二〇二五年度講義題目

大学院

日本文学研究(一)

小松 靖彦

日本文学研究(二)

『枕草子』精読

山口 一樹

中世文学研究(一)

『古今和歌集』精読

高田 祐彦

中世文学研究(二)

軍記物語・中世文学の読解と分析

滝澤 みか

近世文学演習(一)

『続千載和歌集』研究

山本 啓介

近世文学演習(二)

『忠臣水滸伝』精読

大屋多詠子

近世文学研究(一)

人形浄瑠璃『嬬山姥』精読

韓 京子

近代文学研究(一)

研究対象の精査と発表・討議

武内 佳代

近代文学研究(三)

近現代文学思想の研究法を主
とした研究成果の発表・討議

佐藤 泉

日本語学研究(一)

現代日本語研究論文講読

大江 元貴

日本語学演習(二)

中古語研究―源氏物語の読解
を通して―

澤田 淳

日本語学研究(三)

意味と形式の対応および変化

大堀 壽夫

日本語教育学演習

研究テーマの設定から調査デ
ザイン・実施へ

田中 里奈

中国古典学研究

中国音韻学の基礎を学ぶ

戸内 俊介

日本文学演習(一)

日本文学の境界にある文学の
諸問題の検討を通して日本文
学演習の枠組みを脱構築する

白石 佳和

日本文学演習(二)

ジェンダーの観点による文学
研究の理解を深める

久米 依子

学部

文学研究法

日本文学研究の基礎や方法を
学ぶ

山口 一樹

韓 京子

滝澤 みか

山本 啓介

日本文学科研究入門

日本文学科の諸時代、諸分野
への導入

全専任教員

日本文学史

上代・中古文学史

山口 一樹

中世文学史

滝澤 みか

江戸時代文学史

大屋多詠子

近代文学史

佐藤 泉

古典文学概論

古典文学の普遍性と個性
(特殊性)を考える

高田 祐彦

近代文学概論

近現代文学の基礎的知識や分
析方法を実践的に学ぶ

武内 佳代

漢文学概論

「中国文学」をより深く理解
する

和久 希

日本語日本文学情報処理法

AI小説の作成実習を通じ
て、情報処理の基礎を学ぶ

横山 詔一

日本語学概論

学術的見地から日本語を観察
する

大江 元貴

日本語史

日本語の歴史について考察す
る

澤田 淳

表象文化研究概論

表象文化の解釈と分析

中澤 弥

日本学入門

海外の日本研究との対話

小松 靖彦

文学交流入門

〈文学交流〉の視点を身に付
ける

小松 靖彦

日本文化文学入門

留学生のための日本文化文学
入門

井上 高輔

日本文学演習

海外の人々に日本の詩を紹介
する／ウクライナ・スロベニ
アとの〈文学交流〉

小松 靖彦

『日本書紀』の精読

天野 早紀

『古今和歌集』精読

高田 祐彦

『源氏物語』精読

山口 一樹

『更級日記』を読む

吉野 瑞恵

『新古今和歌集』の輪読

山本 啓介

『平家物語』の輪読

滝澤 みか

井原西鶴の描くミステリー小
説を読む

岡島 由佳

人形浄瑠璃『曾根崎心中』精
読

韓 京子

黄表紙『花見話風盛衰記』精
読

大屋多詠子

『群像』掲載の短篇小説を読
む

西井弥生子

日本近現代小説読解のための

研究方法を学ぶ

武内 佳代

ポストコロナル文学やマイナー文学の基礎知識を習得する

松田 潤

大正・昭和の文学論争から時代と文学思想の関係を理解する

佐藤 泉

近代文学研究の基礎を学び論じる

吉野 泰平

村上春樹『若い読者のための短編小説案内』輪読

山路 敦史

翻訳演習

翻訳研究に関する基礎知識や概念、日本の翻訳史を学ぶ

BRUNA, Lukas

中国古典文学演習

中国古典詩歌、文言小説の精読

渡邊 登紀

中国古典文学特講

陶淵明の文(散文および辞賦)を読む

渡邊 登紀

中国文学・思想演習

中国の古典に関する基礎的な

知識の学習

小倉 聖

文学交流演習

戦後から現在の日本のSFの歴史と発展について学ぶ

LARSON, Michael W

日本語学演習

認知言語学の観点から日本語に潜む修辞性と比喩の問題を考察する

澤田 淳

日本語教育における文法教育の位置づけを理解する

庵 功雄

文法史、語彙史に関する代表的な事項や研究方法について学ぶ

中川 祐治

日本語の「問い」を構築するスキルを身につける

大江 元貴

社会言語学、対照言語学の知識から多言語・複言語コミュニケーション研究の論文を読み解く

新井 保裕

日本文学講読

平安時代の私家集の特徴と魅力を読み解く

諸井 彩子

説話文学を読み解く

渡辺麻里子

内田百閒の作品と現代作家の著作の関連を検討する

西井弥生子

〈家族〉神話の生成

稲生 知子

書誌学の基礎的な方法論の修得

一戸 渉

中国古典文学講読

『史記』(伯夷列伝、管晏列伝)を読む

佐川 繭子

日本語学講読

日本語学の理念と研究方法を学ぶ

庵 功雄

書道の歴史と実技

書の歴史をふまえた基本的事項の理解と技法の習得

関 俊史

永由 徳夫

日本語教育概論

日本語教育を取り巻く歴史と社会

田中 里奈

日本語教授法

日本語非母語話者に日本語を教えるための基本知識を学ぶ

特別演習

井上 高輔

『萬葉集』・書物学・文学交流に関する卒業論文作成指導

小松 靖彦

平安時代の文学作品を主たる対象とした卒業論文作成指導

山口 一樹

平安時代の物語・和歌を対象とした卒業論文作成指導

高田 祐彦

短詩形文学とそれに関連する作品を対象とした卒業論文作成指導

山本 啓介

主に中世文学を対象とした卒業論文作成指導

滝澤 みか

近世前期の文学を対象とした卒業論文作成指導

韓 京子

近世後期の文学を対象とした卒業論文作成指導

大屋多詠子

近現代文学を対象とした卒業論文作成指導

武内 佳代

近現代の文化、文学、思想に関する卒業論文作成指導

佐藤 泉

日本語学を対象とした卒業論文作成指導

大江 元貴

日本語学関連をテーマとした卒業論文作成指導

澤田 淳

日本語教育学を対象とした卒業論文作成指導

田中 里奈

日本語教育演習 A

日本語教育文献の批判的な読みからそれぞれのテーマを発見する

田中 里奈

日本語教育演習 B

日本語教育関連論文について議論し日本語教育研究の力を養う

井上 高輔

日本文学特講

戦争下の『萬葉集』受容を通してジェンダーを考える

小松 靖彦

『源氏物語』と山里

高田 祐彦

『源氏物語』の読解

山口 一樹

鎌倉末期から南北朝期の和歌

山本 啓介

軍記物語の生成と展開

戸井 久

滝澤 みか

中国小説『剪灯新話』「牡丹灯記」の日本近世文学における展開

韓 京子

江戸の笑い 黄表紙入門

大屋多詠子

現代小説を通してクィア・フェミニズム批評・ジェンダー批評などの研究方法を学ぶ

武内 佳代

文学作品を通して近現代社会の規律・管理の在り方を考察する

佐藤 泉

文学テクストの精読から脱植民地化の問題を考察する

松田 潤

西鶴作品前・同時代の近世前期怪異小説を読み解く

岡島 由佳

文学交流特講

外国における日本文学の受容とその国際的な展開を考える

ムカルジー 杏奈

日本文学とアジア

中国文学と日本文学の相互影響

戸井 久

表象文化論

能と狂言について多角的に考える

岩崎 雅彦

「表象文化論」についての見識を深める

大山 英樹

アイヌ語の概要を把握し理解する

藤田 護

中国文学・思想特講

中国の文学理論について―『文心雕龍』を中心に―

鈴木 崇義

日本語学特講

「漢字とは何か」について考える

戸内 俊介

日本語教育実習

日本語学習者の発音から日本語の音声のしくみを学ぶ

木下 直子

文章表現法

学術的文章を書いたためのルールと方法を身につける

八木下孝雄

日本語教育実習

日本語学習者を多角的に考える

井上 高輔

日本語教育特講

日本語学習者を多角的に考える

福嶋 健伸

中国文学とアメリカ・ヨーロッパ

戦後から現代の日本のSFの歴史と発展の考察

LARSON, Michael W

表象文化論

能と狂言について多角的に考える

岩崎 雅彦

言語の変異について考える

鎌水 兼貴

異文化コミュニケーションの観点から日本語コミュニケーションの理解を深める

新井 保裕

日本語の成り立ちに関する基礎知識を修得する

福嶋 健伸

日本語学習者を多角的に考える

井上 高輔

日本語教育実習

日本語学習者の発音から日本語の音声のしくみを学ぶ

木下 直子

文章表現法

学術的文章を書いたためのルールと方法を身につける

八木下孝雄

日本語教育実習

日本語学習者を多角的に考える

BRUNA, Lukas

文章表現法

学術的文章を書いたためのルールと方法を身につける

八木下孝雄

日本語学特講

「漢字とは何か」について考える

戸内 俊介

中国文学・思想特講

中国の文学理論について―『文心雕龍』を中心に―

鈴木 崇義

【研究室だより】

*二〇二五年三月の卒業生は

一二三名、四月入学生は一二九

名でした。大学院前期課程の三

月修了生は五名、四月入学生は

五名でした。後期課程の修了生

は一名、四月入学生は一名でし

た。

*二〇二五年度から非常勤講師と

して、新井保裕、稲生知子、岩

崎雅彦、佐川繭子、鈴木崇義、

関俊史、西井弥生子、福岡健伸、

藤田護、松田潤、ムカルジー杏

奈、鎌水兼貴、和久希、渡邊登

紀、BRUNA, Lukas、石澤一志、

東泉裕子の諸先生方に、尽力い

ただいています。

*二〇二五年度は、山本啓介教授

が学科主任を務められました。

【お詫び】会報前号にて、情報の

誤りがありました。訂正してお詫

び申し上げます。(誤)「山本啓介

教授が学年主任を務められまし

た。」↓(正)「山本啓介教授が学

科主任を務められました。」

*二〇二五年度は日置俊次教授が

特別研究(青山学院大学)、山崎藍教授が国内研究(東京大学)のため休講なさいました。

*二〇二五年度日本文学会大会

(春季)・講演会・総会が、六月

二十八日に開催されました。講

演会については本会報七頁をご

覧ください。

*二〇二五年四月より、日本語教

育学が専門の田中里奈教授が

着任されました。

*副手の内藤未希さんが退任さ

れ、黒田理絵さん、大野夕夏さ

ん、葛城博子さんが着任されま

した。

【編集後記】

はじめに、今年度「会報」の作

成にご協力いただきましたすべて

の方々に感謝申し上げます。

今年度「会報」では、日文委員

会は新たに着任された先生にイン

タビューを行う研究室探訪と、表

紙の写真撮影に携わりました。前

年度に引き続き、今年度も「会報」

の作成に我々が関わられたことを大

変喜ばしく思います。

新型コロナウイルスが蔓延して

いた頃から時が経ち、今となって

はその影はなく、以前までの学校

生活を送ることができるようにな

ったと感じます。

今年度は大阪・関西万国博覧会

が開催され、近年類のない盛り上

がりを見せました。その一方で、

国内はもちろん世界中で様々な変

化が生じ、期待感と不安の中での

激動の日々であったように思いま

す。そのような状況下でも、今現

在、私たちが学び続けられること、

大学生活を送り続けられること、

いかに大事なことから考えさせら

れます。

今年度日文委員会は、青山祭で

の出版を見送り、来年度の青山祭

での出版を目標にした準備に取り

組んでいます。以前までは古本市

を開催していましたが、今年度は

熱心に活動に取り組みメンバーを

迎えられたこともあり、新たな企

画に挑戦しようとも考えています。

また、日文委員会は今年度も、春

季大会の運営や日文新聞の作成に

携わることができました。さらに、

演習授業の紹介記事も作成したの

で、新二・三年生が演習授業を選択

する上での一助となれば幸いです。

まだまだ至らない部分も多いで

すが、先輩方が受け継いできた伝

統を大事にしつつ、さらに活動の

幅を広げ、日文委員会を繋いでい

けるように、これからも励んでま

いります。

三年 熊井 花音

編集委員

教員

井上 高輔 佐藤 泉

学部三年生

熊井 花音

学部二年生

前田 龍甫

学部一年生

小嶋 時子

会 報 第六十号

二〇二六年三月一日 発行

渋谷区渋谷四一四二五

青山学院大学総研ビル10F

日本文学科研究室内

編集 青山学院大学日本文学会

電話 (〇三)三四〇九一七九一七

FAX (〇三)三四〇九一八〇〇五